

<原 著>

大学生における自己愛傾向と抑うつ・不安の関連 —反すうと心配を媒介変数とした検討—

山内 健*, 松野 航大*, 宮崎 球一*, 根建 金男**

要 約

本研究の目的は、自己愛傾向が反すう・心配を介して、抑うつ・不安に与える影響を検討することであった。大学生 129 名に対して質問紙調査を実施した。対人恐怖心性が反すう・心配を媒介変数として抑うつ・不安に至るモデル (モデル 1) と、自己愛傾向全体が反すう・心配を媒介変数として抑うつ・不安に至るモデル (モデル 2) の 2 つのモデルを想定し、パス解析を行った。その結果、モデル 2 が採択され、自己愛傾向全体が反すう・心配に正の影響を与え、反すう・心配は不安に正の影響を与えることが示された。このことから、自己愛傾向における対人恐怖心性だけではなく、自己愛傾向全体が反すう・心配を介して不安に影響を与えることが明らかとなった。自己愛傾向者の不安を減弱させるために、反すうや心配を変容させる認知行動的介入が有効であることが示唆された。

キーワード：自己愛傾向, 反すう, 抑うつ, 心配, 不安

問 題

自己愛とは、自己像がまとまりと安定性を保ち、肯定的情緒で彩られるように維持する機能である (Stolorow, 1975)。ストレス状況下において自己価値を見出そうとする自己愛から Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM-IV-TR; American Psychiatric Association, 2000) の自己愛性パーソナリティ障害までを含む包括的な概念である。小塩 (2004) は、自己に対する関心の集中と、自信や優越感などの肯定的感覚を維持したいという一般的欲求をもつ傾向を自己愛傾向と定義した。

近年、自己愛には 2 つのタイプがあるとされている。Wink (1991) は、自己愛には誇大型とされる overt narcissism (ON) と過敏型

とされる covert narcissism (CN) の 2 つの独立した型があると区別した。ON とは、誇大性、特権意識や自己陶醉に代表される型であり、CN とは、過敏性、脆弱性や他者への依存に代表される型である。Zoe, Doris, & Wayne (2010) によれば、2 つの自己愛の型におけるメタ認知的問題 (愛情統制, 共感, アイデンティティの問題) と対人関係困難との間に関連性があり、ON と CN では、メタ認知的過程と対人相互作用の特徴が異なることが明らかとなっている。さらに、Gordon & Melissa (2008) は、ON と CN の 2 つの自己愛の型と批判への敏感さおよびパフォーマンスへの反すう (expected rumination) との関連を検討した。その結果、ON と批判への敏感さおよびパフォーマンスへの反すうとの間に負の相関が示され、CN と批判への過敏さおよびパフォーマンスへの反すうの間に正の相関が示された。自己愛傾向と批判に対する敏感さ、パフォーマンスへの反すうは、自己愛の型に大きく依存するということが示唆されている。つ

*早稲田大学大学院人間科学研究科

**早稲田大学人間科学学術院

まり、自己愛傾向における誇大型か過敏型かによって、その特徴が異なっていることが示されている。

自己愛と精神的健康の関連についても、いくつかの研究が報告されている。中山・中谷(2006)は、自己愛傾向を過敏型・誇大型に分類した。そして、それらと精神的健康との関連を検討し、過敏型と過敏誇大混合型は誇大型と低自己愛型に比べて、精神的健康が低いことを示した。また、清水・川邊・海塚(2008)は、自己愛傾向における「誇大・過敏特性両向型」と「過敏特性優位型」では、抑うつ・不安が高まることを示唆している。これらの知見から、自己愛傾向において抑うつ・不安が問題であり、その関連について検討する必要があると考えられる。

抑うつ・不安の脆弱性要因や維持要因として反すう(rumination)・心配(worry)が挙げられる。反すうとはその人にとって、否定的・嫌悪的な事柄を長い間、何度も繰り返し考え続けることである(伊藤・上里, 2001)。一方、心配とはネガティブな情緒を伴った制御の難しい思考やイメージの連鎖である(Borkovec, Robinson, Prunzinsky, & DePree, 1983)。心配は、日常的にだれもが経験しうるレベルから、DSM-IV-TRにおける全般性不安障害(Generalized Anxiety Disorder: GAD)のように、その制御困難性が問題となることもあるとされている(Wells, 2009)。反すうと心配は類似した概念であるものの、思考のフォーカスが過去と未来に向けられている点で異なる概念である(Papageorgiou & Wells, 1999)。また、反すうと心配は抑うつ・不安の双方に関連があることが示されている(e. g., 高野・丹野, 2010; 高野・飯島・丹野, 2011; Trapnell & Campbell, 1999; Wells, 2009)。

自己愛においても反すうとの関連が示されており、清水・岡村(2010)は自己愛傾向を測定する尺度である Two dimensional model

personality Scale-Short version (TSNS-S) の下位因子である対人恐怖心性とネガティブな反すうには正の相関があり、TSNS-S の下位因子である自己愛傾向とネガティブな反すうには負の相関があることを示した。

自己愛傾向と抑うつ・不安との関連(清水他, 2008)や自己愛傾向とネガティブな反すうとの関連(清水・岡村, 2010)が示されており、さらに反すう・心配と抑うつ・不安の関連が多くの研究で報告されている(e. g., 高野・丹野, 2010; 高野・飯島・丹野, 2011; Trapnell & Campbell, 1999; Wells, 2009)。したがって、自己愛傾向が反すう・心配を介して抑うつ・不安に影響を与えていることが示唆される。しかしながら、自己愛傾向を有するものが抑うつ・不安に至るまでに、どのような認知活動を行っているのかという点に関しては未だ明らかにされていない。

そこで本研究では、自己愛傾向と抑うつ・不安の維持要因とされる反すう・心配および自己愛傾向と抑うつ・不安との関連を検討することを目的とする。

方法

調査対象者

2012年12月中旬に、首都圏の私立大学生149名を対象とし、質問紙調査を実施した。回答に記入漏れのあった20名を除く、有効回答数129名(男性54名、女性75名、平均年齢20.58歳、 $SD=1.29$)を分析の対象とした。

調査材料

①対人恐怖心性—自己愛傾向 2次元モデル尺度短縮版 (Two dimensional model of Social phobic tendency and Narcissistic personality Scale-Short version: TSNS-S; 清水他, 2008): 自己愛傾向を測定する尺度である。誇大型の自己愛を示す自己愛傾向と過敏型の自己愛を示す対人恐怖心性の2つの下位因子から構成される。全20項目に対し、7

件法で回答を求めた。

②ネガティブな反すう尺度（伊藤・竹中・上里，2001）：ネガティブな反すうを行う傾向を測定する尺度である。ネガティブな反すう傾向とネガティブな反すうのコントロール可能性の2つの下位因子から構成される。得点が高いほど、ネガティブな反すう傾向が強いことを示す。全11項目に対し、6件法で回答を求めた。

③日本語版 Penn State Worry Questionnaire (PSWQ; 杉浦・丹野, 2000)：心配する頻度やその強度を測定する尺度である。得点が高いほど、心配傾向が強いことを示す。全16項目に対し、5件法で回答を求めた。

④自己記入式抑うつ尺度 (Self-rating Depression Scale: SDS; 福田・小林, 1973)：抑うつ傾向を測定する尺度である。得点が高いほど、抑うつ傾向が強いことを示す。全20項目に対し、4件法で回答を求めた。

⑤新版 State-Trait Anxiety Inventory の特性不安 (STAI-T; 肥田野・福原・岩脇・曾我, 2000)：特性不安の傾向を測定する尺度である。得点が高いほど、不安が強いことを示す。全20項目に対し、4件法で回答を求めた。

手続き

調査は、授業終了後の学生が集まっている場を利用して、一斉法による質問紙調査を行った。調査用紙配布後は、調査者がその場に待機し、回答の終了した調査用紙の回収を行った。調査の所要時間は約15分であった。

倫理的配慮

調査実施の際には、回答は任意であり、本調査に協力しないことにより、不利益は一切生じないこと、回答は統計的に処理され、個人情報外部に漏れることは一切なく、個人のプライバシーは保護されることを口頭および文章にて説明した。なお、本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て行われた（承認番号：

2012-210）

分析方法

自己愛傾向と反すう・心配および抑うつ・不安との関連性を検討するため、SPSS version 18.0を用いて、相関分析を行った。また、自己愛傾向が反すう・心配を介して抑うつ・不安に与える影響を検討するため、Amos version 18.0を用いて、パス解析を行った。

結果

自己愛傾向と反すう・心配、抑うつ・不安の関連を検討するため、自己愛傾向全体得点および2つの下位因子（対人恐怖心性・自己愛傾向）得点とネガティブな反すう尺度、PSWQ, SDS, STAI-Tのそれぞれの全体得点において相関分析を行った（Table 1）。その結果、自己愛傾向全体得点はネガティブな反すう尺度得点、PSWQ得点、SDS得点、STAI-T得点のすべてと有意な中程度の正の相関が示された。各相関係数は、自己愛傾向全体得点とネガティブな反すう尺度得点 ($r = .41, p < .01$)、自己愛傾向全体得点とPSWQ得点 ($r = .43, p < .01$)、自己愛傾向全体得点とSDS得点 ($r = .39, p < .01$)、自己愛傾向全体得点とSTAI-T得点 ($r = .43, p < .01$)であった。また、TSNS-Sの下位因子である対人恐怖心性得点はネガティブな反すう尺度得点、PSWQ得点、SDS得点、STAI-T得点のすべてと有意な中程度の正の相関が示された。各相関係数は、対人恐怖心性得点とネガティブな反すう尺度得点 ($r = .51, p < .01$)、対人恐怖心性得点とPSWQ得点 ($r = .54, p < .01$)、対人恐怖心性得点とSDS得点 ($r = .53, p < .01$)、対人恐怖心性得点とSTAI-T得点 ($r = .64, p < .01$)であった。そして、TSNS-Sの下位因子である自己愛傾向得点はネガティブな反すう得点、PSWQ得点、SDS得点、STAI-T得点のすべてとの間で有意な相関が示されなかった。

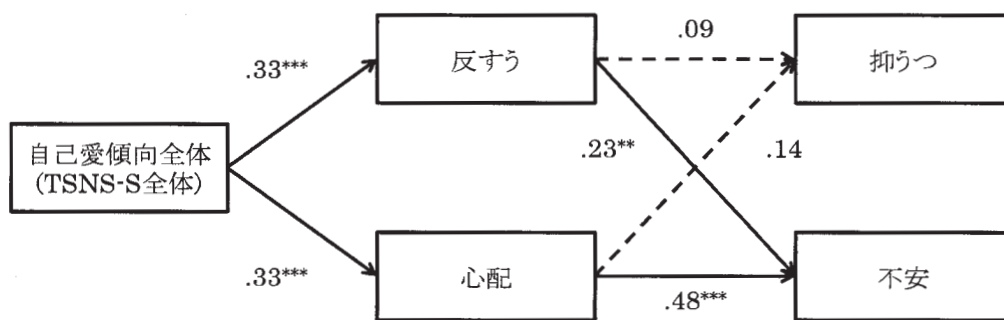
次に、先行研究の知見から自己愛傾向者が反すう・心配という認知的活動を経て、抑うつ・不安に至るというモデルを想定し、パス解析を行った。相関分析の結果において、反すう・心配および抑うつ・不安と正の相関が最も高かった対人恐怖心性から反すう・心配という認知的活動を経て、抑うつ・不安に至るモデル(モデル1)を想定し、パス解析を行った。モデル採択の指標としてAIC, モデル適合度の指標としてGFI, AGFI, RMSEAを用いた。その結果、AIC=52.893, GFI=.930,

AGFI=.472, RMSEA=.312であった。AICおよびAGFIとRMSEAの数値が低かったため、対人恐怖心性の次に反すう・心配および抑うつ・不安と正の相関の高かった自己愛傾向全体から反すう・心配という認知的活動を経て、抑うつ・不安に至るモデル(モデル2)を想定し、再度パス解析を行った。その結果、AIC=32.83, GFI=.980, AGFI=.847, RMSEA=.137であった。そのため、モデル1よりも適合度の良いモデル2を採択した(Figure1)。

Table 1 各変数間の相関係数 (N=129)

	自己愛傾向全体 (TSNS-S全体)	対人恐怖心性 (TSNS-S対人恐怖心性)	自己愛傾向 (TSNS-S自己愛傾向)
ネガティブな反すう	.41**	.51**	-.01
心配	.43**	.54**	-.02
抑うつ	.39**	.53**	-.06
不安	.43**	.64**	-.13

** $p < .01$



** $p < .01$, *** $p < .001$

※有意なパスを実線、有意でないパスを破線で示した

GFI=.980
AGFI=.847
RMSEA=.137
AIC=32.838

Figure 1 パス解析の結果

Figure 1において、自己愛傾向全体は、反すうに有意な正の影響 ($\beta=.33$)、心配に有意な正の影響 ($\beta=.33$) を与えていた。また、反すうは不安に正の影響 ($\beta=.23$) を及ぼし、心配から不安においても正の影響 ($\beta=.48$) が示された。反すうと心配から抑うつへは有意なパスは示されなかった。

考 察

本研究の目的は、自己愛傾向と反すう・心配および抑うつ・不安との関連性を検討することであった。

相関分析の結果、自己愛傾向全体と TSNS-S の下位因子である対人恐怖心性は反すう・心配および抑うつ・不安と有意な正の相関が示された。一方、TSNS-S の下位因子である自己愛傾向では、全ての変数において有意な相関がみられなかった。清水他 (2008) では、TSNS-S 全体得点と TSNS-S の対人恐怖心性得点の高い者は、抑うつ・不安の得点が高く、TSNS-S の自己愛傾向得点は、抑うつ・不安と関連がみられないと報告されている。また、清水・岡村 (2010) では、TSNS-S 全体得点と TSNS-S の対人恐怖心性得点が高い者は、ネガティブな反すう得点が高く、TSNS-S の自己愛傾向得点はネガティブな反すうと関連がみられないと報告されている。本研究の結果は、これらの先行研究の結果とも一致しており、自己愛傾向全体と対人恐怖心性は、反すう・心配および抑うつ・不安と関連があることが示された。

次に、自己愛傾向が反すう・心配という認知活動を経て、抑うつ・不安に至るというモデルの検討を行った。その結果、対人恐怖心性から反すう・心配を経て、抑うつ・不安に至るというモデル (モデル 1) より、自己愛傾向全体から反すう・心配を経て、抑うつ・不安に至るモデル (モデル 2) の適合度が高か

ったため、モデル 1 を棄却し、モデル 2 を採択した。この結果より、対人恐怖心性だけではなく、自己愛傾向全体が反すう・心配という認知活動を経て、不安に至る可能性が示唆された。対人恐怖心性は、自分を肯定的に捉えることができず、他者からの否定に対する恐怖を抱えていることが特徴的であるといえ、一方、自己愛傾向全体は、他者からの否定に対する恐怖と他者からの肯定欲求の 2 つの側面を有することが特徴的であるといえる (清水他, 2008; 小塩・川崎, 2012)。上地・宮下 (2004) では、自己愛傾向全体が高いタイプは、他者からの強い肯定欲求と否定恐怖の両極の葛藤に苦しむとされており、清水他 (2008) は自己愛傾向全体が高い者は対人恐怖心性のみが高い者よりも精神的健康が低いことを示している。したがって、他者からの肯定欲求と否定恐怖の 2 つの特徴を併せ持つ場合、それらが葛藤を引き起こし、他者からの否定恐怖のみをもつ対人恐怖心性を有する場合よりも精神的健康を低下させていると考えられる。そのため、本研究においても他者からの否定恐怖のみをもつ対人恐怖心性を想定したモデル 1 よりも、他者からの肯定欲求と否定恐怖の両方を持つ自己愛傾向全体を想定したモデル 2 の方がモデルの当てはまりが良かったと推察される。

また、本研究では、反すう・心配から抑うつへのパス係数が有意でなかった。上地・宮下 (2005) は自己愛の誇大性・過敏性を含めた自己愛的脆弱性が抑うつよりも不安と強く関連していることを示している。また、これまでの自己愛傾向における過敏型と抑うつ・不安との関連を検討した研究では、抑うつと不安を 1 つの変数として扱っていた (清水他, 2008)。しかし、本研究では、抑うつと不安を独立した変数として扱い、不安にのみ反すう・心配との関連が示されている。したがって、自己愛傾向者においては、抑うつよりも

不安がその特徴であると考えられる。

本研究から、自己愛傾向にある者が反すうや心配といった認知的活動を行うことで、不安に至るという可能性があることが示された。このことから、自己愛傾向者における反すうや心配といった認知的活動に対して、認知行動的介入を行い、それらを変容させることで、不安などの心理的ストレスを減弱させることができると考えられる。

本研究の限界として、抑うつ・不安以外の精神的健康との関連を検討できていない点が挙げられる。清水他(2008)では、自己愛傾向と怒り・無気力との関連が示されており、他の心理的ストレスとの関連も詳細に検討する必要がある。また、本研究は大学生のみを対象としている。そのため、臨床群を含めたより広範サンプルを対象とした検討が求められる。

引用文献

American Psychiatric Association (2000).

Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th Ed., text revision: DSM-IV-TR). Washington DC.

Borkovec, T. D., Robinson, E., Prunzinsky, T., & DePree, J. A. (1983). Preliminary exploration of worry: Some characteristics and processes. *Behavior Research and Therapy*, **21**, 9-16.

福田一彦・小林重雄(1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究. *精神経誌*, **75**, 673-679. (Fukuda, K., & Kobayashi, S.)

Gordon D. Atlas, & Melissa A. Them (2008). Narcissism and Sensitivity to Criticism: A Preliminary Investigation. *Curr Psychol*, **27**, 62-76.

肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・

Spielberger, C. D. (2000). 日本版 State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ 実務教育出版.

(Hidano, T., Fukuhara, M., Iwawaki, M., Soga, S., & Spielberger, C. D.)

伊藤 拓・上里一郎(2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 *カウンセリング研究* **34**, 31-42. (Ito, T., & Agari, I. (2001). Development of the Negative Rumination Scale and Its Relationship with Depression, *Japanese Journal of Counseling Science*, **34**, 31-42.)

伊藤 拓・竹中晃二・上里一郎 (2001). うつ状態に関与する心理的要因の検討—ネガティブな反すうと完全主義, メランコリー型性格, 帰属様式との比較— *健康心理学研究*, **14**, 11-23.

(Ito, T., Takenaka, K., & Agari, I. (2001). Study for Psychological Factors Related to Depression: A Comparison between Negative Rumination, Perfectionism, Melancholic Personality, and Attributional Style, *The Japanese Journal of Health Psychology*, **14**, 11-23.)

上地雄一郎・宮下一博(2004). もろい青少年の心—自己愛の障害— 北大路書房 (Kamiji, Y., & Miyashita, K.)

上地雄一郎・宮下一博(2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 *パーソナリティ研究* **14**, 80-91.

(Kamiji, Y., & Miyashita, K. (2005). Development of Narcissistic Vulnerability Scale from the Viewpoint of Kohut's Self Psychology, *The Japanese Journal of Personality*, **14**, 80-91.)

中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期におけ

- る自己愛の構造と発達の変化の検討 教育心理学研究 **54**, 188-198.
(Nakayama, R., & Nakaya, M. (2006). Developmental Transformation of Narcissism in Adolescents, *Japanese Journal of Educational Psychology*, **54**, 188-198.)
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学. ナカニシヤ出版.
(Oshio, S.)
- 小塩真司・川崎直樹 (2012). 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係—. 金子書房.
(Oshio, S., & Kawasaki, N.)
- Papageorgiou, C., & Wells, A. (1999). Process and meta-cognitive dimensions of depressive and anxious thoughts and relationships with emotional intensity. *Clinical Psychology & Psychotherapy*, **6**, 156-162.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性—自己愛傾向 2 次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連. パーソナリティ研究, **16**, 350-362.
(Shimizu, K., Kawabe, H., & Kaizuka, T. (2008). Social Phobic Tendency, Narcissistic Personality, and Mental Health, *The Japanese Journal of Personality*, **16**, 350-362.)
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性・自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討 教育心理学研究, **58**, 23-33.
(Shimizu, K., & Okamura, H (2010). Cognitive Traits in People With Anthropophobic Tendencies : A Two-Dimensional Model of Narcissistic Personality Comparing Anthropophobic and Social Phobic Symptoms, *Japanese Journal of Educational Psychology*, **58**, 23-33.)
- 杉浦義典・丹野義彦 (2000). 強迫症状の自己記入式質問票—日本語版 Padua Inventory の信頼性と妥当性の検討—精神科診断学, **11**, 175-189.
(Sugiura, Y., & Tanno, Y. (2000). Reliability and validity of the Japanese version of the Padua Inventory. *Archives of Psychiatric Diagnostics and Clinical Evaluation*, **11**, 175-189.)
- Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, **56**, 179-185.
- 高野慶輔・飯島雄大・丹野義彦 (2011). 反芻と心配：抑うつ，不安，主観的睡眠感との関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (20), 147.
(Takano, K., Iijima, Y., & Tanno, Y.)
- 高野慶輔・丹野義彦 (2010). 反芻に対する肯定的信念と反芻・省察. パーソナリティ研究(19), 15-24.
(Tanako, K., & Tanno, Y. (2010). Positive Beliefs about Rumination, Self-rumination, and Self-reflection, *The Japanese Journal of Personality*, **19**, 15-24.)
- Trapnell, P. D., & Campbell, J. D. (1999). Private self-consciousness and the five-factor model of personality: Distinguishing rumination from reflection. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol **76**(2), pp. 284-304.
- Wells, A. (2009). Metacognitive therapy for anxiety and depression. Guilford Press, New York.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-600.

Psychology, 61(4), 590-597.

Zoe, G. W., Doris M., & Wayne W. (2011).

Meta-cognitive and interpersonal
difficulties in overt and covert
narcissism. *Personality and Individual
Differences*, 50, 1000-1005.

The relationship between narcissistic personality and depression/anxiety in university students: An examination setting rumination and worry as the intervening variables

Ken YAMAUCHI*, Kodai MATSUNO*, Kyuichi MIYAZAKI*,
and Kaneo NEDATE**

*Graduate School of Human Sciences, Waseda University

**Faculty of Human Sciences, Waseda University

Abstract

The present study examined the effects of narcissistic personality on depression and anxiety, through rumination and worry. Questionnaires were administered to 129 undergraduate college students. The possibilities of two models were hypothesized. The first model was that social phobia in narcissistic personality tendency leads to depression and anxiety with rumination and worry as the intervening variables. The second model was that narcissistic personality tendency itself leads to depression and anxiety with rumination and worry as the intervening variables. The data collected according to these two hypothesized models were analyzed using a path analysis. As a result, the second model was adopted. The path analysis indicated that narcissistic personality tendency itself has a significant positive effect on rumination and worry. Moreover, rumination and worry have a significant positive influence on anxiety. This revealed that not only social phobia in narcissistic personality tendency but that narcissistic personality tendency itself also affects anxiety through rumination and worry. The findings suggest that cognitive behavioral intervention for rumination and worry are likely effective to decrease anxiety of narcissistic personality.

Key words: narcissistic personality, rumination, depression, worry, anxiety